

岩手県陸前高田市からの報告

濱口 智

岩手県陸前高田市 やどかり・リトル学童クラブ 事務局・保護者OB

陸前高田市内の小学校で教職に就いている私は、長年、保護者として、高田小学校に併設されている「やどかり学童クラブ」、そこから大規模化に伴って分割した「リトル学童クラブ」の事務局を担ってまいりました。わが子は昨年三月に卒所しました。が、私は現在も、事務局として学童保育に関わっています。

二〇一四年三月、「四月から高田小学校勤務を命ずる」という辞令が交付され、おどろきました。赴任後、その忙しさにもおどろいていくうちに五月には運動会が実施されました。運動会について保護者の方々に寄せられた感想のなかでもっとも多かったのは、「運動会の日だけでも災害公営住宅の工事を止められなかったのか？」という声でした。その工事は、グラウンドのすぐ後ろで行われていたのです。

じつは、本稿を書いている八月末現在、陸前高田市では未だ一軒の災害公営住宅も完成していません。九月末頃に完成の予定で、一学期は、その工事のまった中だったわけですが、よく運動会が開催される頃は、骨組みを組みあげる時期にあたっていて、見あげるほど高いクレーン車が、練習をする子どもたちに覆い被さるように移動していました。

このことからわかるように、復興の工事が行われるなか、被災した子どもたちの生活は、被災して数か月経った頃からあまり変化しているとは言えない状況です。それほど広さのない市内の道には、復興工事のため、ダンパーカーなどの大型車両が行き交い、そのなかを子どもたちは安全に通学するために、体力づくりなどは二の次にして、各地の仮設住宅からバスで通学しています。通学

に関しては、家や家族を失わなかった子どもたちも同じ状況です。

仮設住宅は、耐用年数の目安や言われる三年をよっくに経過しており、よっくに土台として打ち込まれた丸太が腐りはじめ、家々がたつきはじめていくと言います。もともと狭いうえに、防音が整っていないため、人々はがまん的生活を強いられています。

そのためか、現在、教師仲間から聞く低学年の子どもたちの様子に、被災した当時の怖かった体験を心のなかで整理できていないのかもしれない……と感じます。また幼かったときの大震災の事実を客観的にとらえ返して言語化するのができていないからかもしれません。市内の指導員の方々からも、同じような実態を耳にします。

陸前高田市内では被災以後、学童

保育のニーズが高まり、二つの小学校で学童クラブが新たに誕生しました。既存の学童クラブでも、人数が増えているところが多いと聞いています。高田小学校では、数年前までは四〇〇人を超えていた児童数が今年は一四〇人程度まで落ち込んでいますが、やどかり学童クラブ・リトル学童クラブの登録児童数は、被災前が九〇人前後（合計）、いまは八〇人台後半と、ほとんど減っていません。

人数が増えている（または、ほとんど変わらない）にもかかわらず、それまで以上に指導員さんに甘えて独占しようとするたり、ついつい乱暴にふるまったりといった子ども様子が少なからず見られます。そうした状況のなか、体調を崩したり、けがをされたりする指導員さんもおられ、人手不足が深刻になってきてお

ります。

* * *

明るい話題としては、昨年度、わが学童クラブ（やどかり学童クラブ）の卒所生である指導員さんが誕生し、次第に力をつけていること、さらにこの夏休みには、複数の卒所生の方々が、臨時指導員として、力を貸してくれたことがあげられます。

「いまが一番苦しいときだ」と、指導員さんとよく話していますが、もう少しすれば、だんだんよくなるのではないかと淡い希望を抱いています。

全国のみなさん、これからも被災した地域の学童保育を気にかけていただけたら幸いです。それが被災した地域の学童保育の支えとなり、その淡い希望が現実となる力になると思います。どうかよろしくお願います。